

堺行基の会 会報

第46号 令和元年9月20日

●平成31年4月7日史跡巡り記録
行基の時代、万福法師が活躍した中河内の史跡探訪

牧野 瑞穂

毎年、桜の開花情報を楽しみにしている春の史跡巡りが今年も行われた。役員会で、これまで行ったことのない所はどこかと検討し、情報検索や下見を経て、柏原市・藤井寺市・羽曳野市を含む中河内にしようと決めました。

柏原市には「おいなーれガイドの会」があるので、ボランティアガイドさんの協力を得て、桜満開のなか、現地説明を受けながらの楽しい史跡巡りになりました。

折しも、この7月には世界遺産に登録されるであろう「百舌鳥・古市

発行 堺行基の会
事務所 堺市中区毛穴町462-8 吉田方
TEL ○七二二二七一一五九七二一
ホームページ <http://gyouki.jp>

古墳群」の古市古墳群をまじかに見ることでもできました。
大和の国・日本の歴史の勉強をさらに深めていきたいと思った旅でもありました。



高井田横穴公園
ガイドさんの説明を聞く

朝9時に三国ヶ丘駅からマイクروبスに乗り、柏原市に向かいます。途中の藤井寺市・羽曳野市にある古

市古墳群を眺めながら走り、**柏原市の高井田横穴公園**に到着しました。公園内には167基の横穴古墳が確認されているそうです。ガイドさんと共に横穴に入ります。ひんやりした横穴内には石棺があったとされ、稚拙な線刻壁画が残っていました。

近くの高井田古墳は5世紀前半の円墳で、百済王族と関係があると云われているそうです。

15世紀も昔の歴史造形物が現存



古墳石室に入る

していることに驚くとともに、こうした史跡を守り後世に伝え残していかなくてはと強く感じました。
ついで、**柏原市歴史資料館**に立ち寄り、**安村俊文館長の講演**「古代大県郡と知識」を聞きました。同市北東部は大県郡と呼ばれ、聖武天皇・孝謙天皇が参拝した寺院が六つあったことが「続日本紀」に記録されているそうです。



柏原市歴史資料館館長の講演

739年、その一つ家原寺のある家原村を流れる古大和川に、**万福法師**は橋を渡そうと努めたが果たさず、のち**花影禪師**が架橋を果たしました。家原村の人々は両師の教化を忘れず、知識を結び754年に大般若経の写経を始めました。
中河内には、万福法師や花影禪師のような、民衆を智識に組織して大きな社会的事業を果たす僧侶がいたというのです。



サンヒル柏原で昼食

昼食は高台にある**サンヒル柏原**で会席膳をいただきました。この高台から応神天皇陵や允恭天皇陵などの古市古墳群が一望できました。一面に広がる桃色の桜と古墳群の新緑を眺めながら、のんびりとひと時を過ごしました。

午後には、2018年に世界灌漑施設遺産に登録された柏原市安堂の大和川付け替え地点を見学しました。安堂付近は、奈良からの大和



サンヒル柏原前で

川と南河内からの石川の合流する地点で、水害の多いところでした。北の大阪城方面へ流れる大和川を西の堺方面に流す流路変更の大工事が行われたのは、江戸中期1704年のことでした。

流路を変更すると広大な面積の農地がつぶれ、村々の移転が必要でしたから、当然に強い反対の声もあつたようです。

分水地点には、工事の中心人物であつた**中甚兵衛の銅像**が立ち、今も川の流れを見守っていました。



中甚兵衛像

しばらく古大和川の流路沿いに北に歩き、ついで東の丘陵部へ入ります。ここに**家原寺跡と知識寺跡**があります。堺の家原寺(えばらじ)と異なり、ここは「いえはらじ」と読むようです。
聖武天皇は、かつて**知識寺の盧舎那仏**を礼拝し自分も作りたいと念願するようになった、と述べています。娘の孝謙天皇も家原寺・智識寺を含む近隣六寺を巡礼礼拝しました。六寺は東高野街道沿いに、きわめて短い間隔で並び立ち、壮麗なさまを



柏原市内歴史散歩

呈していました。残念ながら、六寺はすべて滅び、今は遺跡だけになっています。
ガイドさんたちの説明を受けながら、分水地点↓家原寺跡↓知識寺跡を徒歩で巡りました。よく歩き、少し疲れました。
バスで**藤井寺市葛井寺**に行きました。満開の枝垂れ桜が迎えてくれました。西国観音巡礼の五番札所でした。創建は聖武天皇勅願で行基開基とも伝えます。
最後は**羽曳野市道の駅「しらとりの郷」**で、地元特産品が多く、土産もの選びに楽しいひと時を過ごしました。
行く先々がみごとに桜満開で、贅沢な花見見物を兼ねた史跡巡りで、満足して一日を終えました。
下見やガイドさんとの打ち合わせ、バスの手配など、数か月をかけた役員さんの努力に感謝します。ありがとうございました。

平成30年度収支決算書

(収入の部)

科目	金額	摘要	
会費	168,000円		
参加料	154,000円	史跡めぐり	4月 154,000円 (22名)
雑収入	16,600円	資料代	6,600円
		寄付	10,000円
収入合計	338,600円		
前年度繰越金	256,396円		
合計	594,996円		

(支出の部)

科目	金額	摘要	
会場費	30,800円		
通信費	29,030円	郵送費	
事務費	5,590円	チラシ・封筒	
会報費	30,216円		
資料代	0円		
行事費	156,083円		4月 156,083円
雑費	19,450円	振替料	6,020円
		文団連会費	5,080円
		茶話会	5,350円
		インターネット利用料	3,000円
支出合計	271,169円		
次年度繰越額	323,827円		
合計	594,996円		

銀行預金	44,383円
郵便	163,840円
現金	115,604円
合計	323,827円

会計監査の結果、適正と認めます
堺行基の会 会計監査 西井幹雄

令和元年度事業計画案

2019・4・28

役員会 ①4.28 ②6.23 ③9.22 ④12.15 ⑤R2.2.23 サンスクエア堺
 会員総会 5.19 決算・予算・事業案など審議 サンスクエア堺
 講演会 10.27 若井副会長、ほか 堺市立東文化会館(北野田駅前)
 学習会・茶話会 R2.1.26 森副会長 サンスクエア堺
 史跡巡り R2.4.5

4月7日史跡巡り参加者名
 操田邦男・小室孝子・佐藤盛夫・
 嶋田潤作・多和田マリ子他1名・
 寺川光俊・戸松生吉・中井国芳・
 中井千穂・西野明美・東野信吾・
 牧野瑞穂他3名・南山明弘・
 森直吉・森明彦・吉田靖雄・
 若井敏明

令和元(2019)年5月19日総会の記録

会員総会は、JR堺市駅前サンスクエアにて開催された。吉田会長の挨拶につづき、中井国芳氏を議長に選んだ。ついで、
 ①平成30年度事業報告が会長から、
 ②同年度収支報告が東野信吾会計から、
 ③会計監査報告が西井幹雄監事から、
 ④平成31年度(令和元年度)事業案が会長から、

平成30年度事業報告

2019・4・28

- 30. 4. 22 役員会 総会の準備 サンスクエア堺
- 5. 27 会員総会 平成29年度事業報告・同会計決算報告・同監査報告
平成30年度事業計画案・同予算案等を審議承認
講演 吉田会長「郷土史研究から見えてきた通説への疑問」
サンスクエア堺
- 6. 24 役員会 サンスクエア堺
- 9. 23 役員会 会報44号発行・10月学習会準備、サンスクエア堺
- 10. 28 学習会 若井敏明副会長「行基はどう語られてきたか」
サンスクエア堺
- 12. 16 役員会 1月学習会準備、サンスクエア堺
- 31. 1. 27 学習会・茶話会 森明彦副会長「古代貨幣の呪力」
サンスクエア堺
- 2. 17 役員会 4月7日史跡巡りの準備
- 4. 7 史跡巡り 柏原市歴史資料館・安村館長の講演・高井田横穴墳墓群・サンヒル柏原(昼食)・河内六寺遺跡など

⑤同年度予算案が東野会計から、それぞれ提案され、いずれも賛成多数で承認された。



議長に選ばれ、総会を進行する中井氏

令和元年度収支予算案

(収入の部)

科目	金額	摘要
会費	180,000円	3,000円×60名
参加料	175,000円	史跡めぐり 7,000円×25名
雑収入	5,000円	資料費等
前年度繰越金	323,827円	
合計	683,827円	

(支出の部)

科目	金額	摘要
会場費	35,000円	会場使用料
通信費	30,000円	郵送費
事務費	10,000円	事務用品、レジメ
会報費	40,000円	1回
資料代	20,000円	1回
行事費	250,000円	史跡めぐり 1回
雑費	50,000円	振替手数料・茶話会等
支出合計	435,000円	
予備費	248,827円	
合計	683,827円	

年度	繰越金
平成22年度	約140万円
平成23年	約128万円
平成24年	約68万円
平成25年	約51万円
平成26年	約42万円
平成27年	約28万円
平成28年	約27万円
平成29年	約26万円
平成30年	約32万円

令和元年度役員案

- 会長 吉田 靖雄
- 副会長 森 明彦
- 副会長 若井 敏明
- 事務局長
- 事務局次長 中井 国芳
- 会計 東野 信吾
- 監事 西井 幹雄
- 幹事 牧野 みづほ
- 幹事 和田 智昭 (新)



「18世紀踞尾村の年中行事と食事」について講演する吉田会長 (次ページ)

● 5月19日総会後の講演

18世紀踞尾村の年中行事と食事

— 農民の主食について —
吉田 靖雄

(1) はじめに

私の住む堺市毛穴町は、1840(天保11)年に「町場のような賑わいはない」と評された純農村であった。その農村に住む人々の食事はどのようなものであったろうか。これについては毛穴村のすぐ北に位置する踞尾村に、1747(延享4)年同村の豪農・北村氏の記した「踞尾村村方行事献立覚え」(堺市史統編4・315)が残ったので参考になる。この記録は、村の行事日の食事について記したもので、毛穴村をはじめ近隣農民の食事を考える上で大いに参考になる。

(2) 踞尾村と北村家

踞尾村は、現在の堺市津久野町・



踞尾村の位置

上野芝町・上野芝向ヶ丘町・下田町・神野町・宮下町・鶴田町などにあたる大きな村であった。1665(寛文5)年の「和泉国郷村帳」によると、踞尾村は村高1420石余。うち寺社領1111石余、残り300石余は岸和田藩領(のち旗本小出氏領)であった。毛穴村は江戸時代を通じて370〜390石余であったから、毛穴の3倍以上の石高の村であった。1665(寛文5)年の宗門帳によると、北村家は与兵衛家族3人・

従兄弟家族4人・譜代百姓8人・年奉奉公人4人の計19人の大家族であった。

1665年の与兵衛の覚書によると、田畑屋敷合計3町7反余で手作り地52石余、ほかに小作地245石があったという(堺市史統編1・698〜700)。大鳥郡では屈指の豪農であった。

分家の北村六兵衛門は、1698(元禄11)年、淀川川尻の三軒屋嶋(大阪市大正区泉尾1〜5丁)の開発権を3500両で買い取り、1701年完成させた(堺市史統編1・1783)。

1747年の時点の北村家は豪農であったから、毎食白い米飯と二汁三菜・二汁五菜のような食事も可能であったと推察されるが、覚書は質素でびっくりしてしまふ。

(3) 行事と食事

覚書を見てみよう。第1行から24行までは行事日の食事について

記し、25行から50行までは行事日に食べる餅・ちまき・ひしもち・だんごなどの分量と作り方について記している。食事は、「めし」「うけ茶」「はんばく」「はす飯」の四種類にすぎない。「めし」は米飯、「うけ茶」は三食以外の臨時食で二人前二合の米飯、「はんばく」は麦5米5の半麦飯、「はす飯」は蓮の葉にもち米を包み蒸した飯である。年間の行事日と食事についての記述をまとめると次のようになる(表省略)。

分かる事 ①米飯は年間1060余回の食事の内、11食ごとに1回の割合であった。②草休みと田刈りの行事はめでたい日であるから、この日の半麦飯は米飯に准じるよい食事であった。③以上から農民の常食は麦6割以上の飯であったと推察できる。

(4)農民の主食の大麦―丸麦10割のバクメシから米混じり麦飯へ―
事典の解説 「麦(近世の)水田の米



一汁一菜の食事

は年貢に、畑作物は農民の食糧にという農作物の社会的分化にともない、麦作はもっぱら農民の自家用の食糧生産という性格をもったのである。」(『国史大辞典』吉川弘文館)

「麦飯 大麦や裸麦を炊いた飯、搗いた大麦(丸麦)の飯を、東京多摩地方や長野県などではオバク・バクメシといい、時に小豆やいんげん豆などを混合した。米と混ぜて炊くには、先に丸麦を煮て置き、水分を捨てて粘り気を取り、一緒に炊いた。：押麦が普及するのは、関東地方では大正時代から昭和前期である。：明治大正時代まではバクメシもあつたが、米2に麦8の混合率から米3麦7、半々のバクメシになり、第二次大戦後には米7麦3へと逆転し、1960、70年代に麦飯から白米の二辺倒に変わった。」(福田アジオ他編『日本民俗大辞典』)

北村家は毎日米飯を取る充分な資力があつたが、実際は麦の多い米混じり麦飯を常食にしていた。財力に比べて極端な節約であつたといえる。このような節約は、裾尾村の多数を占める中層農民の常食が、麦10割のバ

クメシか麦の量の多い米混じり飯であつたことを物語っている。毎食ごとの米飯は、村人の羨望からくるねたみ・憎悪を引き起こすことを恐れたのであろう。

北村家や在村大地主が平穩に暮らすには、住民との心理的協和が必要であり、凶作・飢饉・震災などの際に起きる暴動・豪農襲撃にあわないために、日ごろから慎みと配慮が必要であつた。



講演風景

裾尾村の例からして、毛穴村など近隣農民の食事は麦10割のバクメシか、麦6割以上の米混じり飯であつたとみてよいだろうと思う。

●令和元(2019)年7月26日の記録

市制施行130周年記念式典に
本会 堺市特別功績を受賞

7月26日、市政施行130周年記念の式典が、新装の市民会館で行われ、本会は46人の特別功績者のうち文化功績者として、永藤英機市長から表彰を受けました。代表として吉田が出席しました。

この度のことで本会は地味な会ですが、見守ってくれている人がいることが分かります。そのことを会員皆さまと共に喜びたいと思います。受賞者の大部分は個人で、団体

は4つのみ、文化功績は本会と大正琴の会の2つのみでした。本会は過去、平成23年の122周年記念式典において、「文化振興に功績」の理由で、竹山修身市長から表彰を受けました。今回は「特別功績」ということで、一段上の賞になりました。



堺市特別功績表彰状

●平成30(2018)年10月28日
学習会の記録

行基はいかに語られてきたか

若井 敏明

1. 行基研究の問題点

行基とはいかなる人物だったのかは、大きな問題ですが、私のみるところでは行基には三つの側面があるように思われます。

それはまず、(i)政府から「小僧行基」と名指しされて弾圧を受けた面、次に(ii)様々な社会事業活動を展開したという面、そして(iii)大仏造立への協力と聖武天皇が帰依したことに示される朝廷との親密な関係という面です。

ここでは、これまでの行基についての研究の中で、この三者がどのように理解されてきたかを振り返ってみたいと思います。

2. 行基研究の動向

戦後の行基研究の諸傾向をみてみる

と、まず、iとiiを区別せずに把握し、民衆のために活動したゆえに政府から弾圧されたという見方が有力でした。例えば、「(社会事業を行う)行基の活動に対しても、みだりに罪福をとく、百姓を惑わすものとして、きびしい弾圧が加えられた」というものです。これは、1963年発行の『岩波講座・日本歴史』のなかで笹山晴生さん執筆の「奈良朝政治の推移」の二節ですが、このような理解は現在もおおむね見られ、古典的理解といってもいい見解でしょう。

そうしますと、そのような行基がiiiのように天皇の事業に協力するにいたったのはなぜかという問題が当然出てきます。その答えのひとつが、行基は転向したという評価です。人民闘争史から行基をみた北山茂夫さんなどが、行基は人民からの朝廷の側へ立場を変えたといった解釈をいたしました。これはかなり価値判断を含んだ解釈といえますが、それに対して行基の実証研究に取り組んだ井上薫先生(編注・当会初



学習会で講演する若井副会長

を支えた思想とはなにかが問われることとなります。その点について研究を進めた二葉憲香さんは「行基の活動は大乗仏教の利他行の実践」で、それは「反律令仏教」ともいえるものであったと述べました。そのような見解は、中川修さんや宮城洋一郎さんに引き継がれていきます。

このような解釈に対して、石母田正さんは『日本古代国家論』第一部で、大仏造立詔にみえる天皇を中心とした「知識」という「共同性の幻想」に行基は敗北したという行基敗北論を展開しました。これはたくみな解釈で、賛同する人も多かったように思いますが、じつはその背景には、天皇制に「共同性の幻想」を抱かせる側面があるという、石母田さんの現代に続く天皇制に対する問題意識があるように思われます。このように行基は転向したのか、それとも大乗仏教思想を貫いたのか、はたまた天皇制の幻想にとらわ

れてしまったのかといった議論は、ともすれば歴史家の思いが反映されて、史実とは離れて議論されがちになるように私などには感じられます。

このような二種の「神学論争」は、行基の活動の具体相が追及されていくなかで、やがて終焉を迎えることとなるというのが私の見方です。

それは、井上光貞さんの「行基年譜」とくに天平十三年記の研究」や米田雄介さんの「行基と古代仏教政策」の論文によって、社会事業の規模や施設設置時期が明確にされ、iとiiの活動は時期が違うこと



行基画像
(室町初期/堺市博物館)

が明らかになりました。つまり、行基の活動についての古典的理解は、すでに過去のものとなっているのです。さらに行基の活動を支えた人々にも関心が向けられ、長山泰孝さんによる豪族層と行基との関係の追求、勝浦令子さんによる行基と女性や下級官人層との関係の指摘などの成果があらわれ、それらの成果の上にたつて蘭田香融さん、中井真孝さんの研究が進められていきました。

このような実証的研究を踏まえた行基研究はさらにすすんで、1987年に出版された吉田靖雄先生の「行基と律令国家」は、活動の展開の再検討と思想基盤、さらに初期の山林修行の再発見という成果を示したものでした。そのようななかでの行基研究のひとつの到達点に発行された「行基事典」と、近年著された吉田靖雄先生「行基」(ミネルヴァ書房日本評伝選)だといえ

ましよう。

このように近年の行基研究は、その活動の諸様相を、具体的に掘り下げるといふ方向ですすんでいるように思われます。そのなかでも、あらたな視点だと私が感じているものを列挙しておきますと、まずひとつめが、考古学から見た行基の事業へのアプローチがあります。具体的には、狭山池、大野寺土塔、山崎院の発掘などの成果があげられます。

つぎに歴史地理学的手法での事業のプラン復元があります。古代道路と院布施屋、橋などの関連については、この視点が欠かせないでしょう。さらに、これは私などが主張しているのですが、行基と国家プロジェクトとの関係の追求も重要です。かつての北山茂夫さんの解釈とは対極にあつて、行基を国家事業の下請け視するものとも捉えられやすが、欠けてはならない視点だと考えています。

このような、今後の行基研究を考え

るうえで、参考になるのが、昨年（2018年）10月に開かれた東大寺ミュージアムでのシンポジウムでしょう。そこで発表されたテーマは、思想（中川修さん）、考古学の成果（近藤康司さん）、古代道路・氏族との関係（馬場基さん）と多岐にわたるが、みな今後の行基研究のあり方を示唆するものでした。そして、その共通項は、事業家としての行基の具体像であるように私には感じられました。



若井副会長は東大寺ミュージアムでの行基シンポジウムに参加

3. 行基研究の相対化

ただここで忘れてはならないのが、森明彦さん（編注・当会副会長）によって提示されているような、行基の相対化という視点です。先にみた行基のもっているiやiiの側面は、決して彼だけのものではなく、奈良時代には行基以外にもそのような僧侶は存在していたはずですが、にもかかわらず、行基だけが聖武天皇の帰依を受けて、歴史に名を残すこととなったのはなぜか、行基が弾圧を受けていたことをどう理解するかという問題とともに、これからの重要な研究課題だと私は感じています。



行基菩薩像
(東大寺・行基堂)

●平成31（2019）年1月27日

学習会記録

貨幣の呪力と穢れ

森明彦

1. 銭貨ケガレ論への疑問

1998年の富本銭の出土は、貨幣の厭勝法的使用に対する認識を広げ、貨幣の呪力への関心を高めた。しかし、この過程でいきすぎた誤った見解も生み出されている。新谷尚紀は「貨幣はケガレの吸引装置であり、ケガレ（死）がまつている。このケガレた銭貨を賽銭として投じることによって、神は人間も銭貨も浄化してくれる」と述べ、栄原永遠男も新谷説を受け、「銭貨はケガレた存在」であり、「さまざまな契機で手放すことは、ケガレの除去を意味することになる」と論じている。さらに栄原はフロイトに依拠して、「糞と黄金が「置換しうる対立物」、「同一視」される対象であると論じ、

平安時代初期に編纂された「日本霊異記」中巻第四十二縁「極めて窮しき女、千手観音の像により敬い、福分を願ひて、大福を得る縁」にそれがみえると論じた。話の大略は、左記のとおりである。

「平城京左京九條二坊の海使養女は、極めて貧しかった。□穗寺の千手観音像に向かつて福分を願っていると、ある日、その妹が来て皮櫃を姉に預けに来た。「脚に馬の屎染みたり」。妹はすぐ取りにくるからこの物を置いておくれと言った。

いつまでたっても来ないので、行って弟に問うたところ、弟は知らぬと



富本銭・和銅開元

言う。そこで櫃を開き見れば、銭百貫があつた。いつもどおり花香油を買つて千手観音の前に捧げ、見れば、その足に馬の尿がついていた。それで、菩薩のくれた銭だと思つたという。

栄原は、脚に馬糞がついた皮櫃に入っている銭貨は、銭貨そのものが糞尿によってマークされているとみてしてよいとし、古代日本人も銭貨のうち排泄物をみていたと論じた。そして日本古代における糞尿と金銭を同一視する観念の存在を示す稀有の文献史料であり、銭貨は当時の人々にとってケガレた存在であつたと結論づけた。

これに対して、高橋照彦は、馬屎は皮櫃の脚だけでなく、観音の足にも付着していることに注意を促した。馬屎は、銭貨を与えてくれたのが観音の化身であることに養女が気付くに至る結論を導き出すものであり、観音自身が馬屎に象徴

される濁世の道を通ってきたことの証としての機能を果たしていると論じた。そして、馬屎が付着した観音をケガレた存在とは誰も考えることは無いはず



村人と千手観音
(粉河寺縁起絵巻・鎌倉初期)

であると指摘し、この説話から銭貨の本質を排泄物とするのは飛躍があると論じた。

高橋の批判は馬糞が櫃の脚についていたというように解釈する限り正当である。馬・屎・黄金(銭貨)の三要素が一致しているからといって、その要素の持つ機能の差を見ずに、各要素の与えられた意味を同一のものとするのではできない。栄原の議論は説得力に欠けている。フロイト説に則って、貨幣が糞尿と置換しうるものと考えられていたと結論づけることは、日本古代社会において不可能である。さらに、若井敏副会長のように脚に糞がついていたのは妹(=弟)と解釈すれば(首肯すべき―森)、栄原説成立の余地はない。

2. 銭貨と神祇祭祀

次に神との関係についてみていきたい。農耕社会に基礎を置く古代国家にとって、最大の関心事はその年の稔りであった。唐では正月の上辛の日に皇帝自

ら園丘に赴き、牲饗を昊天上帝に捧げて祀る祈穀を大祀として執り行った。様々な相違点はあるものの、唐の祈穀に相当する日本の祭祀が、仲春に行われる祈年祭であった。

『延喜式』祝詞祈年祭条には祈年祭の祝詞が残されている。それによれば、天皇は神々にすばらしい幣帛を捧げ収穫の暁には様々な捧げものをすることによって感謝することを条件に、神々から年(みのり)をもらうのである。その祭祀に際しては細心の注意が払われる。神祇令散齋条には、弔問など穢悪のことに預からないなどの禁忌を規定する。禁忌は神事に用いる幣帛・供饌に対しても及ぶ。上記散齋条の公定解釈である義解は、「穢悪之事」に対して「不浄の物、鬼神の悪むところ」と注釈する。

清浄であるべき祭りの場に穢悪之事が持ち込まれると、神の悪しみを買う。神の怒りを買えば、本来与えられるべき五穀豊穰・年(みのり)が失われて凶作となる。皇帝・天皇の正の贈与に

ある。

3. 銭貨の呪力

銭貨の呪力を考える際に必ず繙く必要があるのが、中国南北朝期の『銭神論』である。そこでは貨幣の呪力の本源が「翼無くして飛び、足無くしても

走る、羽なくして飛ぶ」能力、すなわち単なる支払い手段ではなく、交換手段たる支払い手段であることによって、人々が等価形態として受け入れるところにあると述べている。古代貨幣のもつとも深い本質を衝いた言葉であろう。

●時代小説と歴史事実

吉田 靖雄

時代小説が好きで、気持ちが鬱陶しい時はよく読みます。

吉村昭の一連の歴史ものをはじめとし、最近では佐藤雅美の物書き同心ものにはまっています。

先日ある小説を読んでいると、尋ね人の人相書きの記述があり、実際に似顔絵の挿絵がありました。尋ね人や犯人探しの際に、姿形・人相を説明する場合、文字で示すのが普通で、似顔絵で示すことはないようです。

一例を示しましょう。1724(享保

対する神の正の返礼が五穀豊穰・年であり、負の贈与である穢悪に対する上帝・神の負の返礼が凶作である。

平安時代に成立した八十嶋祭(編注・平安・鎌倉時代に天皇の即位儀礼の一環として行われた祭祀)などの祭祀では銭が用いられるものがある。八十嶋祭で銭が海に投じられるのは、それらが穢れた存在だからではなく、価値あるものを捧げることで、神からの恵みをもたらうことにある。貨幣がケガレた存在であり、賽銭や散銭として神にたいして放り投げれば、神はその銭と投げた本人も浄化してくれるなどという考えは、日本古代の祭祀の在り方ともっとも遠いところにあると言わねばならない。もちろん近代以降、新興宗教のなかには、貨幣をケガレと説いて教祖へ差し出させ、そのことで「ケ・ガ・レ」が除去されたとして、信者が心の平安を得ることはあるのかもしれない。しかし、そうした思想に日本古代史として学問的根拠を与える必要はないはずで



学習会で講演する森副会長

9)年4月、信濃国の上生坂村の曾助が領主へ尋ね人を願ひ出ました。

「曾助家内甚之丞、年五十六、中背より少し大き、やせ、面四角」と、「右同人甚之丞の倅千太、年二十歳、中背、やせ、かたち面なが」の親子二人が三月に家出して行方知らずになったのです。

こうした記述で顔形を想像することは難しいのではと考えますが、どうでしょうか。

かれらの身に着けた衣類については、かなり詳細に記しています。甚之丞の



衣類は無紋ねずみ色の木綿の布子（綿入れ）で、きれ（手ぬぐい）を持ち、麻の縄帯をしめ、無地の麻の袋を持つ、とあります。麻の縄帯にはいかにも貧相なうらぶれた姿が想像できます。

千太の衣類についてはもっと記述が詳細で、衣類の記述から兩人の姿・形が想像できます。

時代小説は読者を楽しませるのが第二ですから、似顔絵を出してきても歴史事実の無視と二蹴はできないでしょう。

テレビ・映画では、江戸の町中風景で、○○藩上屋敷とか南町奉行所とか、公的建物に看板・表札があがっている場面があります。看板をあげることは商人・商店には当たり前のことですが、武士の世界にはないことです。

江戸時代の公的建物に看板・表札をあげることは歴史事実と反していませんが、そうした場面を作らないと、観客には何の場面なのか理解できませんから、これは許されることなのでしょう。

●編集後記

あつい暑い暑い夏でした。いつまで続くのかと晴天を恨めしくみていました。皆さまにはお変わりありませんか。

残暑お見舞い申し上げます。皆さまにはご健勝にお過ごしのことと存じます。

近畿では大雨の被害もすくなく何よりでした。台風の通り道の地域では、大きな被害を受けたようでお見舞いを申し上げます。

46号をお届けします。この10月で会創立26年目になります。

平成5（1993）年に「行基を語る会」で話をするよう故・井上薫先生に誘われ、ついで同6（1996）年9月の本会創立に参加しました。当時は10年ほどで区切りがつくだろうと思っていました。まさか、こんなに長続きするとは思っていませんでした。

吉田 靖雄

※当会ホームページ・会員専用ページのパスワードは、gyoukisan です。